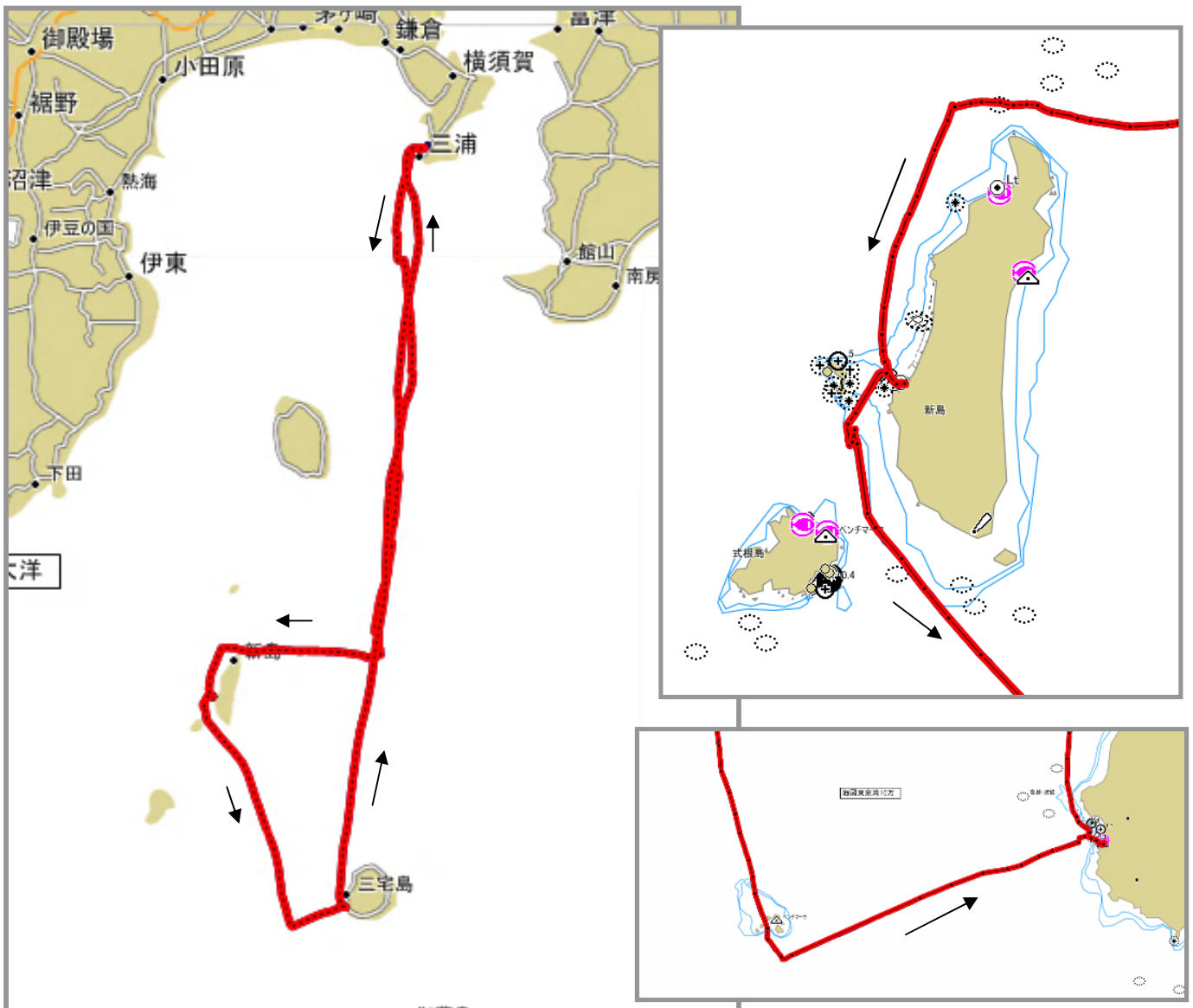




伊豆2島クルージング2011

[2011年5月23日~26日]

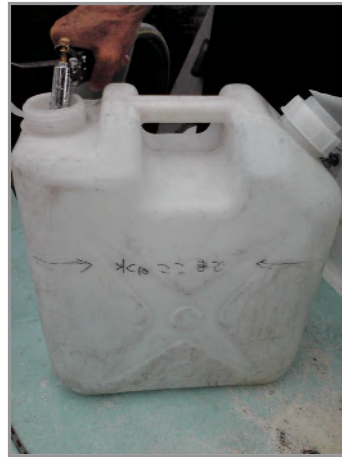
GPS航跡図



【2011年5月22日(日)】

出航準備。買出し班(大谷、平川、横山)は2時間たっても帰らず。陸で遭難したかと思われたが、多量の買物と共に帰還。5万円ぶん買ったとのこと。多分、このまま漂流しても一週間は生きられる量を、バケツリレーで積込み。夕刻から雨、次第に横殴りの土砂降り。オーニングの低い縁から、どざあー、と間歇的に流れ落ちる。その中を、今年、シーボニアにマンションを買ったオリビア・永島一家が、激励のビールを抱えて差し入れに駆けつけ。川島船長、船内を一通り解説、蘊蓄たっぷりつき。小止みになった頃合いを見計らい、彦十にて結団式。結構飲んだが、船長は杖なしでしゃんと歩いて帰りました。

出航は明朝0400。



北から南まで一緒に旅した百戦錬磨のポリタン



働く川島船長:水汲みた

【5月23日(月)】

0400 油壺出航。3時半にはまだ周囲は闇、灯りが必要だったが、ほんの30分で完全に夜が明けた。

目的地は、三宅島阿古港。北東～北北東の真追っ手、但し微風。船長命令でスピニングが1つ積み込んである。いきなりスピランで三宅までまっしぐら…かと、バウマン練習生に指名された氏家はどきどき。

海も空も無彩色、波らしい波はないのに奇妙に大きなうねりがある。

昼にかけて次第に風があがり、うねりも巨大に。後ろからグンと突き上げ、右から左に畝を跨いでローリング。そのままグ、グと押し出されて奇妙な加速。気持ち悪さに後ろを見ると、3mくらいの波が視界を塞いで追ってくる。追いつかれる…と思う寸前、波はスタンにぶち当たり、しゅわしゅわと萎みながら船長の立ちションを洗って行く。うねり、ますます巨大化。この先で何か魔物が待っているよう。谷間に落ちると水の壁で周囲が見えない。船長がキャビンから顔を出し、「波が悪いねえ」と笑顔でいいちこをすすする。氏家は気分が悪くて酒どころではなく、「はあ」と力なく素直な相槌。

追い波で船がふらつくため、船長がエンジンの回転を上げるよう指示。普段は2500回転で巡航速度だが3000まで上げると、何とか波に負けずに走るようになった。しかし3000回転はほぼ上限。上がり続ける波のエネルギーに、必死の防戦が続く。

しかしついに…ぎゃーん、ひいーん、と盛んに呻いていた殿様が(注:UFOではオートパイロットをこう呼び丁重に扱う。ちなみにそのリモコンは「奥方」)、突然のご乱行! 舵があらぬ方向に切れ、波と風の中で船が急に回転する。セールが暴れ、波が船の横腹を打ち、船内で盛大に物が落ちる。寄ってたかって殿を引っこめいてよく見ると、木の台座が真っ二つに割れていた。殿は足場を失い、空中でむなしく屈伸している。殿様、再起不能により戦線離脱。平川さんの手引きに切替えて航行。

新島にさしかかる頃、ついに船長判断で三宅行きを断念、多少近い新島港に避難することになった。1500 新島港入港。後から思えば、この時多少無理してでも三宅に行っておけば良かったのだが…知る由もない UFO 一同、一安心して安着ビールなど飲み、冷たい雨の中で熱い露天風呂につかり「風流だねえ」と良い気分。最初に上級肉を投入し、皆が「うまい」と言うてから中級肉を投入する計画的すき焼きを平らげ、寛いで就寝。

がらんとした港内には UFO のみ。風はまだ北東。西向きの新島港内で、強い北東風が吹いている。

そして、さらにあがり始める。



新島港内:青い屋根は東海汽船の待合所

【5月24日(火)】

夜半から、猛烈な風。新島港は西向きだが、細長い新島はちょうど港のあたりで山が途切れて低くなる。この絶好の風の通り道から吹き降ろす北東風に煽られて、UFO は木の葉のように翻弄され、悪路を行くトラックのようにガタガタと揺れる。恐怖に震えているよう。あああああ、おおおおお、と空が吠え、UFO のヘッドフォイルが聞いたこともない乱打のリズムで、ジャジャジャジャジャ、とけたたましく鳴り続ける。複雑なうねりをまともに受け、5本取った舳いが順番に1本ずつ張り詰めて、船はあらゆる角度から、があん！と衝撃を受けては跳ね返る。入港時は干潮だったが水深が4mあり、喫水2mのUFOは平水なら問題ないが、船長は波をしきりに心配する。波の底で岩に当たれば、船はキールから突き上げる衝撃は想定していないため、弱いという。まさかの時は緊急脱出する準備をし、バースから落ちないように吊りベルトを握って浅い眠り。

何時だか覚えていない。気がつくと、大谷さんが緊迫した声で呼んでいた。「バウ舳いが切れた！」

まだ空が吠え、船が震え、ヘッドフォイルが狂ったように鳴っている。慌てて起き出すと、突然右舷で、がっしやーん！と硬い衝撃。ついに岸壁に激突した。

デッキに出ると、大谷さんが暴れる船を必死に押し返している。ドドッ！と疾風の体当たり、思わずよろける。雨が痛い。

「それ(フェンダー)こっちに持って来い！早くしろ！はやく！！」大谷さんが声を限りに怒鳴るのを、初めて聞いた。

切れたのは一番細いバウ舳いで、2本をV字にしてあった左舷側。アイを通してクリートしてあったものが、アイとの摩擦で切断された。それを極太のアンカーロープにかけ替えると、ようやく船が暴れなくなった。右舷を点検すると、塗装が剥げ、琥珀色の木肌がえぐれて、ささくれている。古いフェンダーをありったけ出し、棒フェンダーを横に寝かして張り巡らした。

揺れるデッキで後始末をしていたら、今度は右後ろで、「バン！」強い破裂音。風雨の中でも、鮮明に聞こえる。スタン舳いの切れ端が、跳ね上がって水に落ちた。今度はスタン舳いが、切れた。これも極太に取り替える。

さらにこの数時間後、取替えた筈のバウのロープが、アイの摩擦で半分の太さに擦り切れかかっているのを発見。アイの代わりに滑車があるブロックを通し、擦り切れたロープの位置をずらして対処。これで何とか朝まで持ちこたえた。キールも損傷することなく、どうやら無事。

危機一髪・嵐の夜が、漸く明けた。みんな寝不足。

灰色でも夜明けは嬉しい。一時北西に変わったかと思ったが、結局引続き北東風、まだヘッドフォイルが盛んに鳴る。うねりも高いが昨夜がどうやらピークだったもよう。念のため舳いを詰めて船を岸壁から離れたので、上陸の際は誰かに舳いを緩めてもらい、上がってからまた詰めてもらう2人体制。

9時の気象通報の後、今日は出航延期と決まった。新島にもう一泊する。高台から見ると外海は、一面の白波。連絡船は午前便が欠航、午後は状況を見て判断するそう。この分では今回の旅は「新島クルージング」で終りかも、と話し合う。船長は、1)下田に行って鰻を食べる、2)下田に行って穴子を食べる、の2つの選択肢を提示。店にまで電話して「行くかも」と予告。鰻または穴子のイメージトレーニングで午前中を費やす。

雨があがり空が明るい、まだ疾風が吹くので岸壁での皿洗いは大騒動。皿もバケツも単独で置くと飛ばされるため、水を入れて重しに。

念のため船長+常時2人が船に残り、順番に露天風呂に入りに行く。昨日も来ていた海女とおぼしき女性陣が相当の長湯。黒い肌着でお湯につかり、熱くなると岩に腰掛けて半身をクールダウン。風で冷えるとまた肩までつかり、我々がいた最初から最後まで、ゆっくりとお湯と風を楽しんでいた。残念ながら岩の上にあるパルテノン神殿風の風呂は、強風のため閉鎖。

どうやら明日は出航できそうな気配に、クルー一同、どうせなら下田でなく三宅へ、と船長を説得。三宅のあとで下田に寄り、穴子食べても良い、と妥協案を示し、俄然三宅の比重が高まる。明日の天候を見ながら判断することになった。まだヘッドフォイルが風に鳴るが、極めて平和に就寝。

【5月25日(水)】

風が落ち、透き通った青空がのぞいている。

すっかり乾いたバウ舳いが、硬く締まってクリートからはずれないので、プライヤーでこじて格闘すること10分。漸くはずしたが、ロープがクリート結びの形に固まったまま伸びない。お前も夜通し頑張ったんだな、よくやった…とねぎらってやりたい気分。古いフェンダーは吊るされたまま、裂けていた。

漁協の競りを見に行くと、地面にこぼれた小魚をホースで洗い流している。ごろごろと排水口へ転がって行くのをじっと見ながら、UFOならあれもおいしく頂くんだが…と思っていたら、哀れに見えたのかおかみさんが声をかけてくれた。

「ヨットで来たの？少しあげようか」4人ね、と言いながら烏賊を袋に入れてくれるのを、「いえ、あの、6人…」と訂正。透き通ってガラス細工のように光る烏賊を6杯、頂いて船に帰る。おかみさんから、「魚を吞んでいるから、早く捌いて出してね」

との伝言。烏賊の体が透明なので魚の縞模様が透けて見える。シェフ平川さんが捌くと、魚がまるごと転がり出た。烏賊本人とほぼ同じ大きさ。6杯のうち4杯に一匹ずつ。(写真左)

あんなおちょぼ口で、こんな魚をどうやって呑むのか？と船長不思議がる。たっぷり食べて満足して泳いでいたのに気の毒に、と大谷さん。一粒で二度おいしい、と平川シェフ。



烏賊刺しに、魚は煮付けで二品に増えた。どちらも美味。烏賊の一部はさらに同じ出汁で煮物になり、興を添える。(写真右)

下田で穴子(または鰻)、に未練がありそうな船長を、折角の島巡りだから三宅に行きたい！とクルーが諫めて、三宅行きに決定。2日遅れで三宅の阿古を目指す。

雲が次第に吹き払われ、絹糸のような淡い雲だけが残っている。青空に久々の日差し。0815 新島港出航、三宅の阿古港を目指す。風は東に回り、次第に南東へ。三宅島が随分近くに見えてびっくり。初日は三宅の影さえ見えず、海も空も同じ灰色で心細いことこの上なかったが、こんな近くに見えていたら、我慢して三宅へ行ったかもしれない。

三宅島は、低い円錐形の活火山「雄山」が真ん中にある、均整のとれた丸い島。低い山なのに中腹から上には植物がなく、上半分が茶色に見える。麓でも火山性ガスで立ち枯れて真っ白になった木々が散在し、白骨のよう。黒いのは溶岩流の跡。水は澄みきって濃紺、「黒潮」の名の通りの暗い青。日差しの下でエナメルのような艶がある。

途中、急遽「三本岳」を見に寄り道することに決まる。三本岳は三宅島の西にある岩礁群。当然周囲を回るものと思っていたら、川島船長が「三本岳の間を通る」と言うので一同緊張。以前、アンカリングして泳いだことがあるので大丈夫だと言う。のぼり一杯に近かったので念のためジブを下ろし、バウに見張りを立てて微速度航行。

近づくと、三本どころではなく無数の岩が点在している。水は清冽、岩と白砂の水底がくっきり見える。水深計を見ながらそろそろ航行。穴1個に見えた穴あき島は、実は角度の違う2穴があるとわかる。振り返ると、ハッキリと髑髏の形。角度が変わるたびに景色が変わる、不思議な岩礁。

1300 三宅島阿古港入港。港から徒歩3分の「ホテル海楽」で入浴、ホテル斜め向かいの店で生鮮品や飲物など買出しの後、船に戻って宴会。



阿古港に入港したUFO

22時の気象通報の後、天気図を前にして翌日の予定を協議。もう一泊して島内観光する予定だったが、どうやら天候不良。梅雨前線が上がってくるため、当分下り坂と推定。明日直帰しなければ、数日居続けねばならぬそう。残念だが島内観光は今回は見送り。下田で穴子を食べる案も、帰路が真のぼりになりそうなので断念、明日は油壺に直帰する。天気には勝てない。海に出ると、人間の身の程がわかって謙虚になる。

雲が晴れて星空。見納めの三宅島を見ながらデッキで歯を磨いていたら、村の防災無線が何か流している。亜硫酸ガス濃度が高いため、屋内退避せよとのこと。硫黄のような臭気は、亜硫酸ガスだったらしい。風が北東なので、南西の阿古地区は危険区域。活火山と共に生きる島の現実に直面。UF0一同、仕方なくキャビンに籠り、ハッチを閉めて就寝。亜硫酸ガスと酸欠、どちらがより怖いかはよくわからない。



整備中の漁船は船台のかわりにドラム缶と古タイヤで上架

【5月26日(木)】

所々青空がのぞくが、雲が厚い。垂れ下がったあたりの陰影は真珠色で、物憂い美景。阿古漁協は7時頃が忙しい時間帯で、トイレにも切れ目なく利用者がある。鍵がよくかからず、私が使用中に誰かが勢いよくドアを開け、「あっ、ごめんなさい」と慌てて閉めた(^_^;)。帽子にカッパ、さらに和式で後ろ向きだから、向こうもよくわからなかった筈。横の水道で遠慮しつつ食器洗い。0800阿古港を出航、一路油壺へ60マイルの航程。平均6ノットで到着予定18時。三崎マリンの上下架は17時まで。今日はポンツーンに係留して船内宴会か。船長は早速夕食の心配、「ととや」があいている時間帯に着くように、とのこと。

風は北東。三宅島西岸を北上すると、島影をすっかり離れるまでが向かい潮、それから徐々に追い潮。黒潮が三宅島に当たり、二手に分かれているのかも。

ワッチ1時間交替。担当者のみがドジャーから常時顔を出しているの、向かい波をまともにかぶる。ドジャーの上からの「滑り波」というのもあり、油断できない。氏家はちょうどドジャーから顔だけが出る身長のため、2度ほど逃げ遅れて計洗面器一杯分くらいを頭からかぶる。皆、ドジャーに隠れてしまい、逃げ遅れたワッチを嘔して酒の肴にする。船長は後半になって気が向いたのか、キャビンから出てデッキに座った。ドジャーの影は満席のため、座ったのは右舷スタン側の絶好の位置。皆、密かに期待してじっと見ていたが、何故か波が収まってしまい、残念ながら船長は結局波をかぶらず。

追い波で予定よりちょっと早く1730三崎マリン帰港。上架には間に合わなかったが、そのかわり誰もいないポンツーンにゆったりと着け、残りの食材で宴会、船内で一泊。翌日、短くなったクルージングの埋め合せに、保田あたりヘダイクルーズする計画をたてた。

ところが。

翌朝0900、出航すると、次々と漁船が入港してくるのを目撃。台風2号が接近するのは多分、明日夜から明後日にかけてだが、場所取りのためか見ている間に3杯、立て続けに入港。入口が塞がると帰航できなくなるのでダイクルーズ断念、そのままリターンして三崎マリンに上架。片付けの後、紀の代にて解団式。(終り)

航海レポート担当：氏家 理央

参加者：

川島正通（船長）

平川浩世（食料担当）、山口紀子（会計担当）、横山 孝（気象担当）、氏家理央（レポート担当）、大谷正彦（写真担当）

計6名



5月22日夜
出航前夜オリビア永島さん一家が見送りに



5月23日 15:00 新島港に入港
入港時は静かな泊地だったが、翌日前線通過で夜から未明にかけて大荒れにもやいロープが擦り切れて切断するなど散々だった



新島港 港の近くにあるモニュメント
「光と風と波の塔」



新島・湯の浜露天温泉
無料の温泉 100円ロッカー 100円シャワーあり



新島・湯の浜露天温泉
パルテノン神殿風のやぐらがある



湯の浜露天温泉
大小五つほどの岩風呂がある



5月25日 嵐も収まった。漁協荷揚場で仕入れに来ていたおばさんから頂いたイカをさばく



地内島
新島と地内島、式根島の間を抜けて三宅島へ向かう



三本岳に近づく
三本岳は三宅島の数マイル西にある岩礁



三本岳の北側の一番大きな岩



三本岳の南側の二番目の大きさの岩
北側の大きな岩とこの岩の間を通過



左と同じ岩
二つの穴が開いていて見る方向によって見えたり見えなかつたりする



三本岳を離れる



三本岳を後にして三宅島に向かう



三宅島阿古港に近づく



阿古港入り口の狭い水路を取って港内へ



阿古港の岸壁に着艇



5月26日
三宅島を離れ油壺へ向かう。



母港に近づく
三浦半島三崎沖
17:30 油壺三崎マリンに帰港

【完】

航跡図・写真担当:大谷 正彦